第５号

丹波市 農業委員会だより

ヒイラギのしおりづくり

早春の希少植物
セツブンソウ

★がんばってる人たち……2～4p
★視察研修報告……4～5p
★小豆特集……6p
★建議書提出……7p
★標準小作料が改訂されます／読者のコーナー……8p

２月３日に青垣町東芦田で節分草まつりを盛大に開催しました。江古花餅、ハスの実などの販売やヒイラギのしおりづくりなどなど多彩な催しでにぎわいました。
夏には、はす祭りが開催されます。

主催　青垣町東芦田　村おこしグループ「江古花園」

地域の取組みコーナー

農業振興と夢の実現に向けてがんばってる人たちを紹介します。

柏原地域

耕作放棄地をなくすための取組について

柏原町上小倉　常岡賢太郎

柏原町上小倉地区は、他地区と比べ、農地が少なく、また、傾斜地のため、土手の草刈り面積が広く、ほとんどの土手は背丈程あります。年間に四回程草刈をするので大変です。

今までは、管理放棄された田はなく、今日に至っておりますが、高齢化により作り手のない田が出始めたため、対策が必要となってきました。

今後、毎年この様な状況が増加することが予想されます。これを踏まえ、農会、水利の関係委員が、十二月九日に集まり、耕作放棄地を出さない取組として、第一回目の協議を行いました。

詳細は第二回目の協議を開催し、有志が集まり、資金や作業日程、地権者との交渉等を決めます。

初挑戦のため何年続くかわかりません。一年目は農具を持ち寄り、ボランティア覚悟のうえ、うまく行けば輪を広げたいと思っております。

氷上地域

専業農家になって

氷上町市辺　足立　俊昭

六年前に勤めていた会社を退職し兼業農家から専業農家になりました。

現在、水稲二・八ヘクタール、野菜を三十アール程度栽培しています。他に、春は田植え、秋には稲刈り等の作業受託を十ヘクタール程度行っています。

専業農家への転換は、収入面で大変不安でしたが、沢山の方から、野菜づくりの指導や直売の方法等の指導をいただき、なんとか軌道に乗ってきたと思っております。

夏には、トマトを中心にキュウリやナス等を栽培し、冬は、大根や白菜等の定番野菜を栽培しています。

米、野菜ともに出来る限り直売し、収入の安定に努力しています。

作業受託は退職前の二十年程度前から行っていましたが、規模を徐々に拡大してきました。

保有米がほとんどで作業委託者ごとに乾燥機で分けております。また、夏を越しても虫がわいたりしないで食味を維持できるように水分乾燥には十分注意しています。

乾燥完了後の水分変化を見極めるのが一番難しく気を遣います。

今後の農業情勢は農業人口も作付け面積も低下傾向にあると思いますが、後継者不足等により農業を続けることが出来なくなった土地を出来る限り借入れ、作付け面積の拡大を図りたいと考えています。

農業経営に意欲を燃やす足立さん

農家と地域が農業を興す時代

氷上町氷上　伊藤　武男

ピンチをチャンスに変える農家の力が必要な時代です。

それには農業・農村を守るための活性化が重要であります。

地域農業の「担い手」をどうするかが焦点になっています。そこで暮らす農家が一番大事に思うのは、その土地への愛着や暮らしを、お互いに支えあう事、地域の相互扶助によって守る事です。無理をしないで、出来れば、そこに住み続けるすべての人が担い手になって欲しいと思っています。

お年寄りの自給農家、定年帰農者、年金農業者も、身内の介護に取り組んでいる母ちゃんたちの農業も、みんなリタイアしないで農業を続けて欲しいというのが農家と地域の願いです。

十年先には会社を退職して田舎に帰りたがっている息子がいるかもしれません。農業をやってみたい、援農したいという人々が増えてくることを望むものであります。

農地・水・環境保全向上対策等の新しい条件を活かし、地域住民、農家の「地域コミュニティ」づくりが大切だと思います。

地域の相互扶助、伝統行事などを活かす現代のむらづくりが必要ではないでしょうか。

高齢者には、どうしても残したい、伝えたい生活体験があり、ふるさとを自慢出来るように子供たちの心を育みたいと願っています。

暮らしの中から生まれる「夢と希望」を持てる農家が主役になればいいと思います。

伊藤さんの景観植物の畑で遊ぶお孫さんたち

青垣地域

地域の活性化を目指して

NPO法人大名草　理事長　足立　正文

大名草区では、平成十七年より市立あおがき農産物加工等直販施設（愛菜館）の指定管理者を受けるのと併せ、農作業の効率化、省力化を図りながら、遊休農地を活用して農業振興活動を行うNPO法人を設立しました。

農地所有者の高齢化や離農等による担い手不足が懸念されている中で、集落内はもとより、隣接集落の農地管理も行い、まちづくりの推進、雇用の促進や環境保全も含めて公益に寄与しながら、地域の活性化を図る活動を展開しています。

昨年度においては、約二・八㌶の農地を管理する中で、ブランド化に向けた生産が奨励されていて、なおかつ経営に欠かせない収益性の高い大納言小豆の作付けを試み、反当り百八十㌔の収穫実績を得る事ができ、まずまずの結果であったと自負しております。

地球温暖化に伴う異常気象や鹿・猪等の有害鳥獣被害による悪条件に悩まされながらも省力化を図りつつ、地域の農地保全と丹波市の特産物発展のために、日夜努力を重ねております。

今後は、初回での発芽率を高める播種日の設定や連作は二年程度にするなどに気をつけて、次年度の栽培に成果をあげ、良質で安心して消費願える小豆の生産に心掛けることを忘れないで農業経営の安定化を目指していきます。

大名草で県立淡路景観園芸学校の生徒が大納言小豆の農業体験実習を行う

春日地域

ハウス野菜を始めました

春日町広瀬　細見　健一

遊休農地の有効利用ということですが、私はそのような事を難しく考えて取り組んだ訳ではなく、ただハウスを設置するにあたり、自分の持っているほ場は、現在、水田として使ってもらっているので、そのまま継続し、住んでいる地区内で遊んでいる土地にハウスを設置した方がいいな、と軽く考えた程度です。

現在の場所に候補を上げ、地主さんに事業の内容を説明してお願いしたところ、快く無償で借りることができ、一歩前進しました。

さて、私は二十五歳から五十八歳まで土木建設業で生活をしてきた人間で、ほ場は持っているものの、この年まで、農業とは九十九㌫かかわった事のない人間です。

ご存知の通り、土木建設業の仕事が減り、また採算性が悪くなり、何かを…と考えていた時、知り合いからハウス野菜を作ってみないか、と言われ取り組みました。

何を作るかという問題も、イチゴは設備費が高くつくから、トマトと考えたぐらいで、後から聞けば、イチゴは素人には難しいようです。

次に利用権の設定、そして農地の形状変更の許可を受け、本業の間に約三ヶ月かけ、二筆、約十㌃をハウスを建てられる状態にしました。

そして、八月から工事に入り、十二月に三棟、育苗ハウス一棟が完成しました。

農業用の単語も分からない人間で、道中の悪戦苦闘は想像にお任せします。冬春の一作、夏秋の一作を通じて、失敗の連続でした。幸い普及所、トマト作り三十年の先輩さん等の助けを受け、取りあえず人様に買ってもらえるトマトが何とか出来たところで、収益性などは考えるところまでいっておりません。

そして、一作目の尻腐れ、二作目の高温障害等、作物を作る難しさを十二分に感じる一年でした。

難しい問題もいろんな人に助けられて、少しずつ進んできました。遊休農地の有効な利用を行政が推進するのであれば、もっと、きめの細かい資金面等での支援が必要ではないでしょうか。

特に私のような、新規就農者に対する指導・援助等を考えていただきたいと思いました。

仲むつまじく、精魂こめて作ったトマトを収穫される細見さんご夫妻

山南地域

子どもに郷土食を伝えたい

山南町岩屋　紅葉会代表　藤原　典子

私たち紅葉会は平均年齢六十一歳の四人メンバーです。

これと言った郷土食のない山里で、子どもたちの喜ぶような物はないか！「あんなお餅があったな！」と懐かしんでくれる様な物を作ろうと、地元で栽培されている赤米、うるち米、餅米を使い、五平餅をヒントとして、仁王

出店した神戸（元町）の物産店に井戸知事がご来店。左から三人目が藤原さん

餅を作ることにしました。

「仁王餅」とは、山南町岩屋の石龕寺の山門に立つ金剛力士像から名づけられています。

手作りで、形は不ぞろいですが、味はバツグンです。昨年秋には、鹿肉入りコロッケを考案し、仁王餅同様に試行錯誤の末、歯ごたえがあり、サックリとした仕上がりで評判もよく、紅葉まつりでは製造が追いつかない状態でした。

子どもたちが「このコロッケおいしい」と言ってくれるのは、有難いことですが、最近では、家では作らずにスーパーで買う時代です。

家庭の味はどうなってしまうのか、親子で料理づくりが出来て、触れ合える場所づくりが出来たらと願っています。

これからも、色々な課題を乗り越えながら、子どもたちが喜び、印象に残る様な郷土食が伝えられるように頑張って行きたく思います。

次のレシピをお楽しみください。

親子でこんなお寿司はいかが…

●海老（塩ゆでする）・きゅうり（薄切り）・しいたけ（甘く煮る）・シーチキン（汁気を切る）・卵（錦糸）

●ラップを広げ、以上の材料を斜めに並べ、その上に寿司ごはんをのせ、ラップでしっかり巻く。

食べやすい大きさに切ってお召し上がりください。

市島地域

仲良しグループの営農紹介

市島町下竹田　須原　勝彦

同じ土地に住み、同じ山を眺め、同じ水に頼るもの同士、もっと人間関係を深め合うことが出来ないものか、同郷意識の美しさを農業を通じて取り戻そうではないか、そんな願いを込めて昨年、竹田地区内の六人が「竹田小豆生産グループ」と銘打って、青木清リーダーのもと発足しました。

構成員の概要は、平均年齢六十五歳で農業経営総面積一五㌶、稲作を主とした年金受給者による第二種兼業者で、職歴は公務員、会社員、建設土木員、農業団体員で、趣味はゴルフ、グランドゴルフ、バレーボール、ハンター、カラオケ等多種多様です。

目的は、①コミュニケーションの場づくり　②自己の健康維持　③小豆生産の試算記録づくりの三つをかかげ、申し合わせ事項として、・生産関係を共同作業とし、単年度清算で繰越はしない。・施設・機具等はグループ内の物を使う。・ＪＡ丹波大納言小豆栽培ごよみを基本とすることとし、初年度は作付面積五十㌃、六ほ場で、基本を知る為、人力作業を重視した取組みをしました。

良かった事は、選別作業の四日間、夫婦の会話や協力者との本音の情報交換が出来た事、人力作業での自分の体力の限界がわかった事、そしてほ場ごとの記録が出来、次年度への自信となった事です。又、課題は作付けに適したほ場の選定が出来ていなかった事や、中耕培土（除草）作業時に早期稲刈と重なり十分な対応が出来なかった事です。今年は排水の良いほ場で、出来るだけ機械作業に移行し、反収百㌔以上を目指す取組みを主とした計画をしており、順次これらが定着し、軌道に乗れば地区内のモデルとして、後継者の育成に役立てて行きたく思っています。

日本の農業、特に稲作は考えねばならぬ時にきています、先進的な農家、農業大学の研究等々、新聞報道で指針等が示されていますが、自分達の地区は自分達で守り活性化を計らなければなりません。

「小さなことから大きなことへと」こんな事なら私でも参加出来ると言う気持ちの転換を促し、実践行動を起こす事への布石となればと頑張っています。

視察報告

丹波市農業委員会では、丹波市の農業及び農政の発展のために、昨年十一月十五日～十六日にかけて先進地視察に行ってきました。

視察先は次のとおりです。

①神戸税関・神戸港輸入農産物倉庫

輸入農産物の保管・消毒状況等について

②滋賀県東近江市

あいとうエコプラザ菜の花館

植物性（菜の花）廃食油リサイクルシステムを作り出す小型バイオ燃料製造装置等の活用による循環型社会が生み出すエネルギーの情勢について

神戸港輸入農産物倉庫で輸入農産物を視察しました

輸入現場から見た食と農

市島町東勅使　西畑　勝

神戸港輸入農産物倉庫の見学で感じたことは、押し寄せる食品汚染、反省すべき点の多い農業政策により、食料自給率が三十九パーセントに落ち込んでいます。穀物の自給率になると二十八パーセントなのです。四十五年前は八十パーセント近くあったのが半分になってしまったのです。

自給率が低いため国民の食料の大半を、外国の農作物に頼るという情けない現実、小麦、大豆、トウモロコシ等は八十六パーセントから百パーセントほとんどが輸入に頼っているのです。

自給率を高めることが大事な事だと思います。

これから地球規模で食料不足が深刻になってくることは明らかなのですから、水田を荒廃地にすることなど絶対にしてはならないことだと思います。

「野菜、穀物」を中心とした、日本の農業を守り発展させることが、私たちの食の安全や安心を保障していく確かな道であるということを国民的な課題として確認する必要があると思われます。

翌日は菜の花によるバイオ燃料について研修を行いました。バイオ燃料製造装置などの活用による循環型社会が叫ばれて久しいですがなかなか進まない現実です。

東近江市愛東地区の方々の石鹸運動への取り組みは大きい事だと思うし、大変な道のりだったと思います。

又、当地では耕作放棄地を利用して菜の花を栽培し、搾油して菜種油にし、その廃油を利用して車やトラクターのディーゼルエンジン用燃料として使用されていました。

このような住民**協働**の地域循環システムへの取り組みを全国に広めるために国がもっと力を入れるべきではないかと思います。

ゴルバチョフ氏は言っています。「なぜ戦争には多大な資金を使うのに、循環問題のためには使わないのか」と、私達が生きていく上で、食と環境問題は後回しにできない問題です。

一キロの所でも車を使うことに慣れてしまっている現在の生活そのものを見直し、耕作放棄地を無くし、旬の物を食して、移動の手段は徒歩、次に自転車に乗るというような生活をすることが大切なことだと思います。

＊**協働とは…**
「住民がお互いに、そして住民と行政が、それぞれの持つ特性を生かしながら、補完し合い、協力し合い、社会的課題の解決にあたること」をいいます。

視察研修に参加して

春日町黒井　小山　一夫

今回の視察は、今までにない充実した、そして刺激を伴う研修でした。

まず初日に神戸港ポートアイランドの住友倉庫で、丁度陸揚げされていたトンガ王国からのカボチャを手際よく等級別に処理され、関西に流通している現実、中国からは、玉葱等が大量に輸入されており、日本からは、倉庫の隅のほうに申し訳なさそうに人参、ゆり根、りんごが台湾に輸出されている現状を見ました。

日本の農産物より格段安くまた日本にもある品種が四季を問わずに輸入されている現実を目の当たりにしました。

毎年増加している優良農地の荒廃阻止は我々農業者がいくら叫ぶより、消費者に食料の危機を理解していただく働きをすべきであると思いました。

わが国の穀物自給率は二十八パーセントと世界一七三ケ国中、百三十番目で、深刻な食料不足が報道されている北朝鮮の半分以下で、砂漠地帯化、ツンドラ地帯並で、誰がこの現実を身にしみて感づいているのか、国民が自覚する情報提供をマスコミやあらゆる機関、組織に働きかける必要があります。

翌日の菜の花館では、琵琶湖の汚染からその解決策として、水を汚染する油に着眼し、家庭の食用廃油を回収し、石鹸づくりをし、環境改善を実施されてきた経緯を研修しました。

これまでは、春日町地域ですでに食用廃油を使って粉石鹸をつくり努力されていますが、その後の取り組みで大きな差が出てきたと思われます。

環境改善は石鹸運動からということで、その後、東近江市愛東地区では、グループ員と行政の担当課職員、町内若者有志で組織化され中核となって、粉石鹸の精製からバイオ燃料の精製するプラントも出来、全住民が、リサイクルは自分の事として考え、そして、さらに地域の休耕農地に菜の花を栽培し、油と景観を、そして環境改善に取り組む姿勢に共感させられました。

丹波市もすでに環境改善に取り組む芽が出ており、何とかしてその組織を中心に輪を広めていく必要があると痛感した次第です。

東近江市愛東地区の菜の花の廃食油リサイクルシステムは、必要なことではありますが、資本がいる為、行政の意志次第と思われました。

バイオ燃料製造プラントの説明を受ける

小豆特集

春日中学校生徒が大納言小豆特集新聞を発行!!

春日中学校一年三組の皆さんが、春日町東中の柳田さんに取材に行かれ、大納言小豆について研鑽をし、地域特産物にかける想いを壁新聞に表されました。

丹波市農業の担い手に育っていただきたくここにご紹介します。

また、丹波市内においては、丹波大納言小豆（茶さや）を狭条密植栽培という方法で省力化の試みもされています。

現在、ほとんどが手作業で行っている播種、収穫を機械化する取組みです。

畝を立てずに通常よりも間隔を密集させて種をまくことで、刈り取りはコンバインで出来る利便さがあります。

いろんな工夫や農家努力の結果、一九年度の小豆の作付面積は一八年度よりも八二・五ヘクタール増加し、一反当たり収量も約百キログラムになってきました。

丹波大納言小豆が地域特産物としてますます名を上げ、次世代に受け継がれることに希望が持てます。

◎丹波大納言小豆（茶さや）の収穫量

年度産別	作付面積（ha）	ＪＡ丹波集荷量（ｔ）	１反当り平均収量（kg）
平成18年度	168．0	163	97
平成19年度	250．5	252	100
比較	82．5増	89増	—

春日大納言小豆特集新聞

11月4日号
3組
大納言小豆班
畑友和
荻野健也
神澤一貴
久下凌
岸部浩明
濱部圭吾

大納言小豆の歴史をたどると

大納言小豆は一七〇五年に藩主の青山下野守の命により、国領東中で採れる小豆が幕府へ献納され明治維新まで続けられました。（氷上郡史より）

最近では、愛子さまの誕生の時に献上されました。

大納言小豆の名前の由来は、腹割れしない特性を、殿中で抜刀しても切腹を免れた大納言に例えられたことからきています。

大納言小豆の魅力

春日大納言小豆の魅力は、大粒で薄皮な上に、小豆全体には美しい光沢を帯び、煮炊きしても型が崩れず糖分が高いことですが、なんといっても魅力は味です。また、春日大納言小豆は北海道産の小豆に比べて倍の大きさです。

完熟するとさやが黒くなるのも、春日大納言小豆特有のものです。

生産者から消費者へのメッセージ

四季を通してたくさんの野菜を楽しめる丹波市。とりわけ春日で採れる小豆が美味しいと言われています。学校給食にも取り入れてどんどん食べてほしいと、言われていました。

「一番うれしい時」

一番うれしい時は、ビーンスレッシャーできれいに豆が出てくる時が一番うれしいとおっしゃっていました。

「一番苦労していること」

冬野菜の三大天敵害虫の被害と圃場の設定。秋に高温期が長く続くと、ヨトウムシ、コナガ、アブラ虫が多く発生して、また同じ所に同じ物を作ると「ラガ」がへるようです。だから竹村さんは「まず土を育てる」をテーマにしているそうです。

「オススメの料理」

赤飯

赤飯は古くから出産や婚礼などの縁起のいい日に用いられる食べ物です。宮中では平安時代に登場しているが民間で用いられるようになったのは江戸時代後だと言われています。丹波地方にもかつて吉事の15日にその年に採れた小豆で赤飯もしくは小豆飯を作る風習がありその伝統は現在も郡で守り継がれています。

編集後記

「取材を終えて」

竹村聰一郎さんに、春日大納言小豆についていろいろと教えてもらいました。説明もよく分かりました。小豆のさやに害虫がついていたりしていて大変だとはじめて知りました。これからも元気に、大納言小豆を作って欲しいと思います。

辻市長に建議書提出

農業を取りまく厳しい環境において、地域特産物の振興、地産地消の推進、営農相談業務の充実等５項目にわたる農業振興施策に関する建議を丹波市に対し行いました。

基幹産業として明日の丹波市の農業を推進する為に、早急なる対応を望むものです。

【辻市長に建議書を手渡す西田会長(右)平成19年10月2日 丹波市役所にて】

1 地域特産物を中心とした農業振興について

米価の下落により、米以外の農作物により農業経営の安定化を図ることが急務となっています。

これまで丹波市では大納言小豆、黒大豆、丹波栗、山の芋、丹波ひかみネギ、薬草、花卉などの農産物について、丹波市ブランドの確立に向けた取り組みがおこなわれてきました。

しかしながら、知名度、シェアの点ではまだ不十分であり、丹波市農業を支える産物とはなっていません。つきましては、次の点に留意し、農業振興を図るべきと考えます。

①地域特産物を含む農産物の販売流通体制の確立について

効率的かつ安定的に農産物を供給していくために、消費者ニーズを把握し、消費者が求める農産物の生産拡大を図り、京阪神地区への産地直送についての体制を確立すべきであると考えます。また、消費者への直接販売や異業種の知恵を活用した新規販路の開拓などに取組むなど、さらなる流通体制の強化を図る必要があります。

さらに、丹波市の農産物や農産加工品の流通について「守り」から「攻め」に転換するために、また品質の良さや生産過程などの安心安全をひろく都市部の方々に知ってもらうために、アンテナショップの出店を検討すべきです。

②小豆共済制度の導入について

市においては、平成19年度からＪＡとタイアップして小豆種子の助成を強化され、丹波大納言小豆を丹波の特産品として育成され、小豆の作付面積が増加傾向にあります。

つきましては、市において小豆の共済制度を導入し、小豆生産農家の経営安定を推進するべきと考えます。

③特産物に対する価格補償制度について

農家の安定した収入が得られるよう特産物振興の一環として、特産物の価格補償制度の導入について検討すべきと考えます。

2 学校給食を中心にすえた地産地消の推進について

丹波市にはたくさんの農産物がありますので、地産地消の一環として学校給食への地元農産物の利用拡大を図るため、また地域産業である農業をもっと身近なものとして子供たちに知ってもらうため、生産団体との協議を十分に行い、生産供給体制の整備・支援を関係機関と連携してさらに推進する必要があります。

また安全・安心な農産物を市民に提供するため、環境保全に配慮した農業を支援し、地産地消の拡大をはかる施策を強化する必要があります。

さらに、丹波市で生産された農産物を安定供給するために、農産物の出荷調整等を行うための農産物貯蔵施設の整備が必要であると考えます。

3 市独自の営農相談業務の充実について

新規就農者や帰農者を含め農業者に対して、営農相談等の迅速かつ的確な対応を図る市独自の体制を整備する必要があると考えます。

4 有害鳥獣対策について

有害鳥獣対策については、猟友会の協力による駆除及び被害防止柵に対する補助の両面から対策を講じられているにもかかわらず、農作物に多くの被害が発生し、生産意欲の低下や農地荒廃の増加の一因となっています。

つきましては、個人での有害鳥獣対策には限界がありますので、地域で取り組む防除対策に対する助成措置の一層の充実強化を図る必要があります。

また、生息数の適正な管理や被害実態の詳細な調査・研究を行い、防除技術等の有効な対策を早期に確立するよう「兵庫県森林動物研究センター」に対して働きかけるべきと考えます。

5 農地保全委員の設置及び遊休農地解消の推進について

農地情報活用委員の活動をコーディネートしその機能を強化するため、農地保全委員（仮称）の設置を検討し、遊休農地の解消、農地の流動化を一層きめ細かに進めるべきと考えます。

また、かねてより要請をしております特定遊休農地である旨の通知について、的確な対応をするべきと考えます。

平成20年2月20日　編集・発行／丹波市農業委員会　〒669-4192 兵庫県丹波市春日町黒井811番地　TEL.0795-74-1504　FAX.0795-74-1055

標準小作料が平成20年4月1日より、下記のとおり改訂されます。

標準小作料は、貸し手・借り手の小作料の目安となるものです。

実際の賃貸借にあたっては、借り手・貸し手の状況や、農地の状況・利用状況等さまざまですので、この額を参考にして貸し手・借り手で相談して小作料を決めてください。

なお、貸し借りにともなう作付け・農地管理・費用負担等の色々な条件についても、十分に相談しておいてください。

農地の区分			標準小作料(10aあたり)
田	上田	ほ場整備あるいは未整備田で、集団的に存在していて耕作が便利で農業生産力の高い農地。	7,000円
	中田	上田、下田のいずれにも属さない農地。	4,500円
	下田	集落の中に介在、あるいは山林等に近接していて耕作が不便で農業生産力の低い農地。	1,500円
畑	標準小作料を定めず。		

＊平成20年4月1日から適用（平成23年3月31日まで）お問い合わせは、丹波市農業委員会（電話74-1504）

読者のコーナー

柏原町柏原の村岡孝司様からお寄せいただきました川柳をご紹介させていただきます。

・うまい米
つくる意欲の
わく米価

・いい種を
選ぶ心で
農委選

・いい米を
増やすも減らすも
米価から

ご投稿ありがとうございました。

農林水産省の資料に基づくと、米づくりの時間給が二五六円となっています。

これでは意欲が湧かないし生活も出来ません。

品目横断的経営安定対策も一年で名を変えなくてはならない農政に怒りよりもあきれてしまいます。

これからもどしどし農業に関するエッセイや川柳、写真などをお寄せください。

表紙のサブタイトルも募集します。皆様からのご応募をお待ちしています。

編集後記

きらびやかなお節とは反対に、その辺の草道に生えている雑草が主役の七草粥は、正月でなまっていた身体に再び活を入れてくれるように思う。セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロとなっている。なんとなく葉っぽい香のする草たちである。そのせいか、気付け薬を飲んだように思わず背筋が伸びる。やっと、新年の清々しさが身体にみなぎってくるのである。

ところが、農政の方は「品目横断的経営安定対策」がたった一年で改定され「水田経営所得安定対策」になる。

「負けるな農民。踏まれても強く生き、七草のように人に命を吹き込む雑草のように強くなろう」

農地相談日のお知らせ

農地に関する相談をお受けします。

地域	4月	会場
柏原地域	15(火)	生涯学習の森
氷上地域	15(火)	氷上公民館
青垣地域	15(火)	青垣住民センター
春日地域	14(月)	春日庁舎
山南地域	14(月)	山南支所
市島地域	14(月)	住民センター

相談時間：青垣地域は午後3:00から4:30まで、
その他の地域は午後2:00から3:30まで。

会　　場：相談会場は当日、案内板等でご確認下さい。

全国農業新聞
NATIONAL AGRICULTURAL NEWS
経営とくらしに役立つ情報をお届けします！
毎週金曜日発行　購読料1ヶ月600円(送料共)
お申込は丹波市農業委員会まで

PRINTED WITH SOY INK